

点検・公約の現在地

16年度県当初予算案

③

「事故が起きてもおかしなことがなかった」。年明けかから間もない1月5日、県が管理する松山市由良町（興居島）の由良港で臨港道路への移行を目指す。

がくいの腐食により沈下。住民や専門家に衝撃が走った。安全第一のインフラで老朽化が進む実態が露呈され、維持管理があらためて課題に浮上する。

天井板が崩落し、11人が死傷した2012年の中央自動車道・笹子トンネル事故（山梨）を受けて本格化したインフラ点検。愛媛でも修繕すべき箇所が浮き彫りになってきた。

ただ財政事情は厳しい。東北豪雨は茨城の鬼怒川で

堤防が決壊。甚大な被害をもたらした記憶が新しい。河川施設では、洪水時の川面の高さより背後地が低い堤防や水門、樋門（ひも

ん）を対象に年1回の点検が義務化されており県は14年度、堤防に茂った草や樹木などを取り除いて初めて本格的に調査した。

早急に対策が必要な危険箇所は、堤防が276河川（504基）のうち163カ所、水門・樋門などは653施設のうち101施設に上った。15年度は危険箇所の予備軍で劣化が進んでいる実態も判明した。

県によると、都道府県別の延長で海岸が5位、河川が6位、道路が18位と管理する施設が多い愛媛。県は「1巡目の点検が終わっていない施設もあり、どれだけ修繕箇所が出てくるかわからない」とする。

修繕の優先順位に関し、愛媛大大学院理工学研究科の全邦釘助教は「劣化度を適切に判断できる知識や技術、経験が必要。県民に説明できる決定方法でなければならぬ」と指摘している。

（丸岡裕美）



臨港道路が沈下した由良港で腐食して変形したくいを調査する県や大学の関係者ら＝1月10日、松山市由良町

老朽インフラ対策

「予防保全型」に移行へ